

工芸の専業化と社会の複雑化 —西アジア古代都市出現期の土器生産—

西秋良宏

Craft Specialization and Social Complexity :
An Overview of Pottery Production Systems of Ancient Mesopotamia

Yoshihiro NISHIAKI

工芸の専業は独立専業と従属専業にわけて論じることができる。前5-3千年紀における西アジアの土器生産をながめてみると、都市出現の前は独立専業、出現後は独立・従属専業の双方によって実施されていたことがわかる。そのような専業体制の変質は、当時進行していた社会の複雑化プロセスを反映しているに違いない。そのメカニズムを説明するには、余剰や効率性強化にもとづく自立的な経済発展論よりも、政治、階層性、あるいは物品のもつ象徴的意味などにかかわる社会構造の変化に着目した議論が有効であろうと考えられる。

キーワード：古代メソポタミア、ゴードン・チャイルド、独立専業、従属専業、威信財

This paper is an overview of the literature concerning the specialization in pottery production in ancient Mesopotamia and its implications for understanding the emergence of urban society. It suggests that pottery production prior to the early 4th millennium BC was mostly conducted under the independent specialization system, while that of the later period was apparently governed by a mixed system of independent and attached specialization. The shift seems a rapid one, probably guided by a variety of social factors such as political and symbolic demands in an increasingly complex society.

Key-words : Ancient Mesopotamia, V. G. Childe, independent specialization, attached specialization, prestige goods

はじめに

社会学や人類学だけでなく、考古学においても近年、都市論がさかんである。西アジアの考古学は、この分野について特別な発言をする資格をもつ。他の都市からの伝播や刺激なしに都市が成立したプロセスは、少なくとも旧世界では西アジアをフィールドにしている研究者のみが扱い得る研究課題であるからだ。

日本西アジア考古学会では、このテーマに関して既に二度の研究集会をおこなっている。一つは、1997年に実施した第1回シンポジウム「西アジア古代都市をめぐる考古学—その成立と展開—」である。そこでは、集落の形態や機能に着目して出現期の都市を定義する試みがなされた（近藤1997）。もう一つは、1998年の第2回シンポジウム「古代西アジア土器職人の世界—都市出現期の土器生産」である。それは、土器生産体制の変化を手がかりとして、都市出現期の社会変化をとらえてみようという試みであった（西秋1999）。都市社会は大きな人口からなっている。それを維持

しているのが各種生産活動や経済の組織化であるという点には多くの研究者が同意している。第2回シンポジウムでは、前5～3千年紀の土器生産をとりあげ、その変化と、それが反映しているであろう社会の変化を様々な角度から論議し、都市の発生プロセスをさぐる一助にしようと企画された。その成果の一部が、本号の特集記事となったわけである。

都市出現期に生じた社会の変化を体系的に説明したのは、考古学ではおそらくV.G.チャイルドが最初であろう。彼は、その変化が革命的であったとみなし、10ほどの重要な変化をあげている。その中には工芸に関する変化も含まれていた。すなわち、都市の出現とともに工芸の専門家が出現したとの予見をなした（チャイルド1951）。専業という工芸システムは、自給自足の農民共同体ではなく、十分な生産力と多様な階級をふくむ国家ないし都市において初めて成立しうるとみなしたのである。この見方は、以後の研究の枠組みを導くこととなっているが、実は、西アジアに

おける工芸の専業化と都市誕生プロセスの関係は十分に論証されてきたわけではない。専業にしても都市にても、関連する多様な要素を考慮せねば定義すら不可能な難問であり、特にその原初段階の研究は一筋縄でいかないというのが大きな理由であろう。

この特集でも、その両者が詳細に論じられているわけではないが、各論文では、関係する実資料のサーヴェイと分析が試みられている。具体的な分析はそれらにゆずり、本稿では、工芸の専業化という問題に関する最近の研究をいくつか検討し、西アジア古代都市における土器生産を考察する場合に生じる論点を探ってみる。それをもって、本特集の導入にかえることとしたい。

工芸の専業化

最近、チャイルドの提示したモデルをめぐっていくつかの論文が刊行されている (Manzanilla 1987; Wailes 1996など)。その一つ、S. ミリケンの論考には「チャイルドの亡霊と旧石器時代における専業の問題」という興味深いタイトルがつけられた (Milliken 1998)。それは、工芸の専業化がなされたのは都市出現期であったというチャイルドの言説を教条的にとらえるあまり、それ以前にみられるかも知れない「専業」の検討が不十分であることを論じたものである。そして、実際に、オーリニヤック期の牙製ビーズやソリュートレ期の木葉形尖頭器の製作など、ヨーロッパの後期旧石器時代には専業化の痕跡が多々みられることを指摘している。

西アジアでも専業の出現が都市社会成立以前であったことをほのめかす事例は多い。たとえば、先土器新石器時代に盛行したナヴィフォーム式石刃の製作は材料、技術の取得ともかなりの知識と熟練が必要な工芸であり、村内にいた非常勤の職人が担当したという主張がある (Quintero and Wilke 1995)。また、同じ頃さかんに用いられた石製容器も、同様の理由に加え、製作にさらに時間がかかることから職人の技であるとされる。また、土器生産については、その開始直後から既に専業化していたという見方が、繰り返し提出されている。前6千年紀にレヴァント地方の暗色磨研土器が広域で流通したことや、ハッスーナ期には大量の焼成が可能な土器焼き窯が発明されていたことなどが、その根拠である (常木1997など)。ハラフ期の優美な彩文土器については、専門家の手によるものであることを示唆する研究者は、さらに多い。交易されていたことが胎土分析で証明されているし、アルパチヤの TT6焼失建物のように特異な製作コンテキストが発見されてもいる (Mallowan and Rose 1935)。

こうした見解を全て認めるとするならば、工芸の専業は都市化のはるか以前から実施されていたことになるから、

チャイルド以来の見方とのすりあわせが必要である。一方、それらの「専業」と都市化の時期の「専業」とは区別すべきだという見方もありうる。少なくとも旧石器時代の狩猟民がおこなった尖頭器製作と、青銅器時代の都市住人が実施した轆轤引き土器の大量生産などは、質的な違いがあるようみえるからである。

いずれにしても、まず、専業とは何を意味しているのか、工芸の専業化をどんな点に着目して理解したらいいのかを整理しておく必要があるだろう。ここで専業(化)というのは specialization のことである。専門(化)、分化、分業、特殊(化)、特化などの訳ももちいられているが、専業で統一したい。性や年齢による仕事の分担は、ここでは問題にしない。議論の対象は、同性・同年齢階梯の人々にみられる職業のちがいである。また、狩猟や黒曜石採掘、儀礼などの作業ではなく、工芸(craft)に限定することにする。専業の定義と分類をめぐる研究をいくつか概観することから始めよう。

チャイルドは、この概念を明確に定義していない。しかし、「食料生産という基礎産業からひきはなされ」て工芸産業に従事し、「共同体の余剰なわけ前と自分の製品とを交換する」ことだと考えていたことは著作からわかる (チャイルド1951: 36)。一つの社会において異なる生業に従事している者がいること、それぞれの従事者が相互に生計を依存していること、の二点を重視していたのである。

その後、専業化を都市ないし文明の成立と関連させる言説は多くの著者によって繰り返されているが (例: Wheeler 1956、ホークス 1973)、専業の定義について掘り下げた検討が始まったのは1970年代後半以降のことであるようみえる。

口火をきいたのは、R. エヴァンズである (Evans 1978)。彼は、バルカン地方の銅石器時代の工芸の発達について論じる際、専業の定義にふれている。彼は専業を、1) 当該生産の従事者が社会構成員の少数であること、2) 労働時間のいくらかをその生産にあてていること、そのため3) 少なくともいくらかは基本的な生計活動をおこなっていないこと、また4) 製品とひきかえに他者から生計必需品を得ていること、と定義している。この定義は、項目は増えているものの、チャイルドの考え方と大きくかわるものではない。1) と3) はチャイルドのいう生業分化に関わる事項であるし、4) は相互依存に相当しよう。また、2) は活動が非常勤(part-time)である場合を認める見方であり、専業の一つの種別に言及しているにすぎない。後述するように、チャイルドもそのような専業形態にふれた発言をしている。

この後もいくつかの定義が提出されている。それらを分類してみると、大きく二つに分けられるようだ。第一は、

チャイルドやエヴァンズが示した生計の分化と相互依存という二特徴を踏襲した定義であり、代表的なのはJ.コスティンのものである。彼女によれば、専業とは「分業による規則的かつ恒常的な、そして組織化されている場合もある生産システムである。そこでは生産者は生計の少なくとも一部を世帯構成員外との交易関係に依存し、一方で消費者は自ら生産しない物品の入手を彼らに依存している」関係と説明される(Costin 1991:4)。また、マヤ期の遺跡を分析対象とするH. J.シェイファーらの定義もこれに近い。彼らは消費者との関係を積極的に強調し、専業とは交換を目的とした恒常的生産をおこなうことだと述べている(Shafer and Hester 1991)。

もう一つの定義は、より広義なものである。代表的なのが、J.クラークの定義である。彼は、「工芸の専業化とは譲渡可能な恒久財を非扶養者(nondependent)の消費のために生産することである」としている(Clark and Parry 1990)。コスティンらの定義との大きな違いは、クラークは生産者と消費者の相互依存(mutual dependency)の関係を定義に含めるべきでないと主張していることにある(Clark 1995)。彼は、本質的な見返りを得ない専業生産はありうるし、消費者に生計を依存していない非常勤専業工人例は民族誌にいくらも認められると述べている。また、生産システムが規則的(regularized)、恒常的(permanent)、組織的(institutionalized)でないものも含めて考えている点も違う。単発的・自発的な事例も考慮にいれているのである。イランの銅石器から青銅器時代にかけての状況を論じたM.トシの見方も、クラークらのものに近いかもしれない。彼は、専業とは当該集団における所与の物品の一人あたり生産高がばらつくことであると述べている(Tosi 1984:23)。また、北米の古インディアン期遺跡における石器製作について専業の存在を指摘したJ.アーノルドも、生産地で必要な量以上を生産することが専業であると書いている(Arnold 1987)。製品の行方や相互依存についてふれていない点で、これも広義の定義に分類できるだろう。

要は専業を限定してとらえるか、広く考えるかである。世帯内ではなく共同体内の生産活動の分業(differentiation of productive tasks)を基本にして、それを、担当者間の相互依存とその恒常性でもって限定するかどうかの違いといえる。狭く定義した場合、その条件を満たす状況は、そもそも一定以上の複雑さをもつ社会にしかあらわれない可能性がある。一方、広くみる定義では、本質的な見返りを得ない例、交易を目的としない贈与や貢納、あるいは恒常的・規則的でない単発的行為も含まれるから、専業とはほとんどいかなる集団・社会にも認められる事態となる。先に述べた旧石器時代や新石器時代の状況も、全て問題な

く専業ということになるだろう。

こうした二つの見方のどちらが有効なのか。筆者は広義にとらえておくのがよいと思う。工芸活動の社会的分担は程度の差こそあれ、ほとんどの社会にみられる。したがって、そのことを前提として、それぞれの社会や経済の中でそうした行為がどういう役割を果たしていたかを検討することのほうが重要だと考える。専業には様々な形態があることを認め、生計の相互依存やその恒常性というのは、そのヴァリエーションを定義する基準の一つだとみるほうが合理的であろう。専業の研究とは社会や経済の組織性の問題に他ならない。専業がみせる様々な側面を検討するには、最初からあまり狭く定義しないのが得策と考える。

工芸の専業化と社会の複雑化

専業を柔軟に定義するとすると、それらをいかに分類、分析するかの視点を定めねばならない。実は、チャイルドも専業にはいくつかの形態のあることを認めていた(Wailes 1996)。彼はメソポタミア都市出現期にあらわれた専業職人の特徴を説明する際、それ以前、新石器時代にもあったと思われる専業を対比的に述べている。すなわち、都市の職人たちは社会的余剰を収集できたエリートたちによって生活をさえられ、金属産業など特殊な工芸に従事する常勤の工人たちであった。一方、新石器時代にも実施されていた可能性が高い。土器生産や石材採掘、石斧製作などの専業は共同体が実施する非常勤の専業であり、社会経済的重要性も高くなかったと説明している(Childe 1951)。つまり、専業を生産者と消費者の関係(独立か従属か)、専門度(常勤か非常勤か)、規模(個人単位か家族単位か工房単位か村単位か大規模なものか)で識別する見方を提示していたのである。

最近では、A. K. シーヴェルトが専業の分類項目を整理している(Sievert 1992)。彼女はチャイルドがあげた項目の他、地理的関係(集中か分散か)、生産物の性質(日用品か贅沢品か)、種類(物品か行為か)、生産者あたりの生産量(少量か大量生産か)、生産者と消費者の依存度(交換か給付、貢納か)といった視点に基づく分類が可能であることを指摘している。これには、さらに生産者と消費者の依存の恒常性(恒常的か偶発的か)も含めうるだろう。どの観点を重視するかによって、いかような分類もありうる(表1、2参照)。

これらのうち、社会の複雑化、都市社会の成立を追求するにあたって重要な分類は、生産者と消費者の関係にもとづくものだと思う。なかでも、チャイルドが指摘したような生産者の消費者に対する従属関係という視点である。これはT.アールによって体系化されている(Earle 1981)。彼は専業を独立専業(independent specialization)と従属専

表1. コスティンによる工芸専業の分類 (Costin 1991, Lewis 1995 を整理)

独立専業

個人専業 (Individual specialization)	独立した個人ないし一家が在地で消費する分を生産
分散工房 (Dispersed workshop)	やや大きい工房が在地で消費する分を生産
集団専業 (Community specialization)	独立した個人ないし家族単位の生産者が共同で、地域レベルで生産する分を生産
集中工房 (Nucleated workshop)	やや大きい工房が共同で、地域レベルで消費する分を生産

従属専業

分散労役 (Dispersed corvee)	非常勤の工人が家族ないし在地社会レベルでエリートないし政権に提出する分を生産
専属工人 (Individual retainers)	エリートないし政権をパトロンとする常勤の個人が生産
集中労役 (Nucleated corvee)	政権に非常勤で雇用された個人がエリートないし政権の専用工房で生産。
専属工房 (Retainer workshop)	エリートないし政権をパトロンとする常勤の個人が、隔離された専門工房で大規模に生産

表2. クラークらによる工芸専業の分類 (Clark and Parry 1990, Lewis 1995 を整理)

独立専業

給付 (prestation)	製品を贈り物として手渡す
物々交換 (barter)	製品を他の品物と交換する
通商 (commerce)	製品を一定の取り決めにしたがって交換
小売 (small shop)	世帯規模の小さな工房兼小売り店
工場 (factory)	アダムスミスのいう pin factory

従属専業

個人後援 (patronized)	個人がパトロンとなって生産に関与し、工人の作業中の生活を保障する
機関後援 (presinct)	宗教的あるいは国家の機関がパトロンとなるもの
国家後援 (state-sponsored)	国家がパトロンとなるもの
経営 (putting-out)	産業革命以前にあった cottage industry に類するもの。スポンサーが原料・道具を提供する。
貢納 (tributary)	一般工人が自らおこなうもの。原料・道具とも工人が調達する。十分な報酬はない。
奴隸 (servile)	奴隸や召使いを用いておこなう。
強制労役 (corvee)	工人は労働力を提供。原料・道具は国家が提供。工人の報酬はない。

業 (attached specialization) に分類した。独立専業とは一般マーケットの需要に対する生産活動であり、従属専業とは一部エリートの管理統制下にあるお抱えないしお雇い工芸である。後に彼は、両専業の製品や用途に違いのあることを詳述し、独立専業では日用品の製作が主体であるが、従属専業では政治・交易に用いるための奢侈品・貴重品を主として生産するのだと述べている (Brunfiel and Earle 1987)。また、各々の発展の契機についてもこう推測している。すなわち、独立専業は、原材料の分布が不均等であったり製作に技術的な熟練を要するため専門家にゆだねたほうが生産効率が高い場合、およびマーケットが大きくかつ安定しており交易にともなうリスクが小さい場合にうまれた。一方、従属専業は、支配者層が権力や経済を統制するために開始したものとしている。大別すれば、前者が経済主因、後者が政治主因でうまれたということになろう (Lewis 1995)。

この見方が重要なのは、それによって、工芸の専業化の研究と社会の複雑化の研究とを理論的に結びつけることができるからである。古代都市を扱う場合、大きな人口や製品の高い需要、あるいは権力・権威の存在など都市社会が備える政治経済的側面を専業研究から分析する切り口を提供しうる視点なのである。

アールの提言はもっぱら理論的な推論であったが、これを広範な民族誌的・歴史民族誌的数据を用いて検証した研究があるので紹介しておく。先ほどもふれたクラークらの分析である (Clark and Parry 1990)。彼らは専業の性質と社会の複雑化の度合いとが本当に相関しているのかどうかを、53の民族例について定量的に探っている。材料となつた民族例には、古代ローマやインカ帝国など史料による事例も含まれている。社会の複雑さ（集団のサイズ、人口密度、政治的統合、社会の階層化、農業への依存度）、工芸専業の発達度（表2のタイプ出現数、職種の数、職種をタイプ別に集計した数、両者の関係を重み付けした係数）、工芸専業に関する諸特徴の有無（常勤、従属専業、後援専業、強制専業、異常発達製品、装飾品生産、日用品生産）を個々の民族事例について数量化し、それぞれの相関を統計的に求めている。

重要な結論は次の二点である。一つは、常勤専業、従属専業、後援専業はいずれも社会の階層性や政治的統合と相関が強く、人口密度や集団サイズ、農業依存度などとは弱い相関しかもたないという点。第二は、従属専業は比較的単純な首長制社会と結びつきが強く、常勤の独立専業はより複雑な高度階層化社会と相関している、という点である。この結果をもとに彼らは、社会の複雑化は従属専業と相関しつつ発展したのであって、常勤の独立専業は社会の階層化が進展した末に出現した都市化の産物ではなかったか

と、推察している。

クラークらの専業の分類（表2）はあまり体系的でない。そのため、かれらの結論で、先のアールの予見を厳密に検証することは不可能である。それでも、第一の結論は、従属専業は経済よりも政治主導で発展したという仮説をほぼ裏付けているように見える。また、二点めの結論も興味深い。専業の起源について、チャイルドは、生産経済の発展による余剰、人口増そして余暇によって誕生したと説明し、エヴァンズは生産の効率性という進化的な利点が専業を発展させたと述べていた。いずれも経済主因説による専業起源論であった。これに対しクラークらの分析は政治要因を強調し、独立専業が発達する前に従属専業が発達していたのではないかと、示唆している。ただ、かれらのいう独立専業とは常勤の場合であって、非常勤のケースは検討されていない点は注意を要する。

この分析は独立、従属という観点から専業を探ることが、社会の複雑化研究にとって確かに有効であることを示唆している。ここで示された民族誌的・通文化的なパターンに照らして、個別の考古学証拠を吟味してみることも意味があると考えられる。西アジアの古代都市出現期の土器生産について、関係する証拠をひろってみよう。

西アジア古代都市出現期の土器工芸

新石器時代の大形集落をどうよぶかという問題を別にすれば、西アジアで最初に都市が成立したのは前4千年紀である。早くから知られているウルのピットFやウルクのアンナ神殿地区の巨大な工房地区は、前4千年紀以降には土器産業が大量生産化されていたことを示している。また轆轤引き土器の普及を専業化の証拠とすれば、広い定義によらずとも、この時期の土器生産が専業体制になっていたことは議論の余地がない。問題は、それが独立専業なのか従属専業なのかという点である。

前4千年紀以降には文献の証拠も利用できるようになる。粘土板の記録によれば、文字が出現した頃には既に陶工という職種があつたらしいとされる。それは前4千年紀末のウルク期古拙文書に既に、「陶工」や「陶工の長」など後世の職名と類似したサインがみられるからである (前川 1989)。ただ、4千年紀から3千年紀前半にかけての文献は解読がなお十分でない。比較的多くの情報が得られているのは3千年紀半ば以降についてである。幾人かの文献学者によってなされている紹介 (Postgate 1993, Crawford 1991, Moorey 1993, Zettler 1996, de Mieroop 1997など)によれば、南メソポタミアにおける当時の土器生産についていくつか共通する特徴を整理することができる。たとえば、

1) 陶工という単語は、土製品一般を製作する工人に対し

- て用いられたこと
- 2) 陶工地区は都市内の特別区、ないし周辺村落にあったこと
 - 3) 常勤で作業するのが一年のうちの特定期間にすぎない陶工がいたこと
 - 4) 土器は大量に生産されていたこと
 - 5) 陶工は通常数名単位で作業していたこと
 - 6) 神殿や宮殿に常勤の陶工がいたこと
 - 7) 陶工に報酬が支払われていること
- などは一般的な特徴である。

中でも重要な記載があるのは、前3千年紀末のウル第三王朝期の文書である(Waetzoldt 1971)。そこには、土器の詳細な分類、それらの一日あたり生産量や製作時間などが記載されている。この頃には、織工や大工などと並んで陶工という職業が確立していたこと、宮殿ないし神殿はかれらの管理に意をはらっていたことが明かである。エリートたちのお抱え陶工がいたのであろう。土器生産に従属專業が適用されていた証拠である。

一方、従属した陶工だけでなく独立した者もいたらしいことを、R.ゼトラーが示唆している(Zettler 1996)。陶工が土地の取引をおこなっている文書がファラから得られている。自由な商行為が可能な陶工がいたのであるから、彼らが土器を取引していたことも推定できる。神殿・宮殿が管理しない取引があったことを示唆するもう一つの証拠は、実は、神殿・宮殿経済に関する文献にあっても土器についての言及がきわめて少ないと自体である(Crawford 1991)。土器についての記録の少なさは、エリートたちが生産の管理統制に執着した金属や織物産業に関する文書が無数に残されているのとは好対照をなしている。日用品という土器需要の高さを考慮すれば、その少なさは注目に値する。前3千年紀にあっても、中央権力が統制しない土器生産が相当程度あったという見方が可能であろう。百人ないし千人単位で専属の織工を擁し、国家の独占となっていた織物生産の場合とは、ずいぶん異なっているようだ。

この点は、考古学的証拠の検査からも指摘されている。重要なのはG.スティングとM.ブラックマンが東北シリアのレイラン出土品について実施した分析である(Stein and Blackman 1993)。彼らは、都市の規模が拡大したレイランII期(前2500-2200年頃)の土器群の胎土分析を実施し、遺跡内・周辺遺跡間で比較検討した。その結果、都市内では複数の工房の存在が示唆され、一方、地域的にも土器は各集落で在地生産されていたことが判明した。すなわち、レイランという大都市の内部においても周辺一帯にあっても、土器生産を統括するようなセンターは見いだせなかつた。これをもって、彼らは、この時期の土器は形態の規格性などから見て専業生産されたに相違ないが、神殿や宮殿

によって統制されていたのものばかりではなかったと結論づけている。

土器が完全な国家独占、従属專業とならなかつたのは、生産が技術的に容易であること、材料の粘土が普遍的に得られること、日用品であること、さらには運搬に手間がかかること、事業に季節性のあることなどを考えれば納得がいく。陶工集団をかかえておくことは、そのコストに比べて益するところが少なかつたのであろう。また、この頃には、金属や織物など、はるかに効果的な威信財が既にあつた。加工する工人と支配者層との密接な依存関係が発達したのは、それらの威信材であって、土器の生産についてではなかつたとみていいだろう。貴石や鉱石など威信財用の資源を求めて南メソポタミアの集団が大規模な長距離交易が開始するのが、都市の出現した後のウルク後期であることは(Oates 1993)、その証拠である。

さて、都市出現以前の状況はどうか。ウバイド期の土器生産に関する証拠が増加しつつある。ハムリン盆地のテル・アバダ遺跡の例は以前から知られていたが(Jasim 1985)、最近、シリア領のユーフラテス川流域で土器工房があいついで発掘されている。テル・アバルとテル・コサック・シャマリである。そこでは、工人たちが集中して作業したらしい工房地区が見つかっており、専業の陶工がいた証拠とされている(Nishiaki et al. 1999, Fortin 1999: 49)。

ウバイド期の土器生産が独立專業であったか従属專業であったかを論じるには、まず、従属專業を可能にするようなエリートがいたかどうかを検討する必要がある。ウバイド期の社会は一般に首長制(chiefdom)と記載されることが多いが、権威のあり方や再分配の実態については意見の一致をみない。他よりも大きな建物、豊富な家財をもつ家屋が発見されている一方で、特定個人の権威を示すような構造、副葬品をもつ墓が見つかっていないからである。これについて、1) 首長はいたが象徴的威信財ではなく穀物など現物の収集や再分配(staple finance)で権威を保っていたのだとする見方(Stein 1994)と、2) 実は集団を代表する個別の首長というほどの権威は存在しなかつたのだという見方(Maisel 1999)の二案が出されている。ただ、2)の場合にても集団の意志決定は必要なのであり、それは共同体内の代表者集団がおこなつたのではないかという見解が提出されている(Fortin 1999, 小泉1999)。どちらであるのかの詳細な議論は本稿の目的をこえる。当面、指摘しておきたいのは、「首長」と呼べるかどうか、あるいはその人数は別にして、いずれの見方も集団にリーダーがいたことを否定しているわけではない点である。したがつて、こうした指導者層にかかわる従属工人がいた可能性を検討するのは許されるであろう。

結論から言うと、ウバイド期には従属專業はなかつたと

みるのが妥当である。イランのスシアナ平原の事例を検討したJ.バーマン (Berman 1994) の研究が参考になる。彼女は、精製・粗製土器の胎土や焼成窯の分布などを分析し、ウバイド期の土器生産はほぼ一貫して在地主義であったこと、それらが権力に統制されていた証拠はないことを論じている。また彼女は、民族誌にみられるように、タックスとして製品を徴収することで、陶工を従属させえた可能性も指摘している。

一方、ウバイド土器には手の込んだ彩文装飾がみられると、威信財に最適な金属の利用も後年ほどには本格化していない。日本の縄文時代に「群を抜く逸品」たる土器が上位階層者をパトロンとした工人によって作られた可能性が指摘されているように(渡辺1990)、一部のエリート用土器が従属専業で製造されたことも考えられなくはない。だが、考古学的証拠は、これに対しても概して否定的である。たとえば、個人の権威や階層を反映するとみられる墓の証拠に、それがあらわれていない。エリドウやテル・カシュカショクなど100以上の中から発掘された遺跡でも、飛び抜けて優秀な土器を副葬品をもつような特別な個人の埋葬例がみつかっていない。副葬土器はいずれも均一といってさしつかえない生活雑器である。土器以外の副葬品についても、その傾向はかわらない(小泉1999)。また、スタインがアバダの発掘結果について指摘しているように、富者の家屋に付属する土器焼成窯であっても、そこで特別な土器が製造されていた形跡はみられない (Stein 1996)。

唯一、特例の存在が想定できるとすれば、宗教的な土器についてかも知れない。ウバイドの後期になると、司祭らしき人物に用いられた副葬された特殊な土器がみられるという(小泉1999)。技術的には他の土器とちがわないが、特殊な装飾や造形の細部など儀礼に関わる手順が一部司祭ないしそれに従属する工人に秘匿された可能性は残される。ただ、これは土器そのものの詳細な検討をへなければ確認できない。現在までのところ、そのような証拠は提出されていないようである。たとえば、テル・コサック・シャマリではおそらく儀礼用とみられる蛇形土偶が装着された特殊土器が出土しているが、それは一般の無文土器と同じ工房で製作された可能性が高いのである (Nishiaki et al. 1999)。

結局、ウバイド期の土器工芸は独立専業であったと考えておくのが適当である。では、その形態はどのようなものだったのか。それは、都市出現以降に稼動したような恒常的かつ常勤の独立専業であった可能性は考えにくい。ウバイド期の遺跡は一般に小形のものが多く、そのような小さな集落では十分なマーケットが確保できたとは想像しがたいからである。また、一集落で複数の窯が見つかるのが通常であって、各世帯が土器を製作していたことも明らかで

ある。一方、集落外にも土器が搬出されていたことは事実であるが (Davidson and Mckerrell 1980)、小集落の集団が交易を主たる生業にしていたと考えるには、大小ふくめてウバイド期土器製作跡の発見例が多すぎる(井1995)。こうした状況は、集落内での調達・消費が土器生産の基本であったことを示唆している。では、テル・コサック・シャマリのように数世帯が住んでいたにすぎない小形集落でありながら、大量の土器を生産していた工房がみつかっているのは、何を意味しているか。それは、土器を共同で生産することがあったことを暗示しているように思う。各世帯に分散した非常勤の陶工たちが共同で製作にあたるという形式もあったという説明が妥当性をもちそうだ。コストインの分類にしたがえば(表1)、独立の分散工房あたりに比定できるのではなかろうか。製作のコストが共同出資した富でまかなわれたのかどうか (Fortin 1999: 49) は検討の余地があるが、いずれにしても、ウバイド期の専業とは営業や商売というイメージからはかなり遠いところにあるように思われる。

おわりに

社会の複雑化、階層性の維持、強化には従属専業による工芸の独占が大きな役割を果たしたというモデルが、近年、関心を集めている。主として新大陸や太平洋地域をフィールドとする人類学者から提出されたものである。このモデルを手がかりに西アジアの都市出現期をながめてみると、ウルク後期以降の金属器や織物、貴石など威信材の生産には確かに思い当たる点が多い。しかし、日用品であった土器の生産については全く該当するところがない。既存の証拠をつきつめていくと、メソポタミアにおける都市出現前の土器生産は独立専業によるものであり、出現後は独立・従属専業の双方が実施されていたということになる。従属専業による土器生産が社会の複雑化を導いたのではなく、それが開始されたのは、むしろ、社会が複雑化した後のことであったのだろう。

ウバイド期の独立専業からウルク期後半以降の独立専業・従属専業並存体制への移行の様相は、ブラックボックスである。一見して、両者の間にはギャップがある。それを調べるのが今後の課題となる。生産地と消費地の地理的関係、規模、専門度、生産量、生産者と消費者の関係、その恒常性など、多様な観点から考古学的証拠を検討していく必要があろう。要点は従属専業の発生の契機と、独立専業の質的変化のプロセスをどう説明するかである。現状の見通しでは、土器生産の従属専業は都市化の産物とみられる。独立専業の変化についても、同様の事態が想定できる。その解明には、余剰や効率性にもとづく自立的な経済発展説よりも、政治、階層性、あるいは物品のもつ象徴的意味

などに起因した人間側の主体的欲求に着目した議論が成果をあげそうに思われる (Peregrine 1992, Wattenmaker 1998)。

工芸の専業化の研究は、特定の行動の担い手に焦点をあてたものである。つまり、不特定多数ではなく、担い手を同定し、かれらがその社会ないし経済においてどんな役割をはたしていたかを知ることの研究である。ジェンダーなどと同じく、先史考古学がながらく手つかずにしておいた分野の一つだといってよい。専業の体制が人口や権力といった都市に不可欠の性質と密接に関わっていることは確実である。この研究は社会の多方面の分析を要求する難題であるが、それだけに都市社会出現のプロセスをみるために新しい側面を切り開く可能性がある。今回の特集記事が、そうした方向に何らかの寄与をなすものであることを期待したい。

本稿は、平成9-11年度文部省科学研究費補助金基盤C「紀元前5~4千年紀の北メソポタミアにおける土器製作工人に関する社会考古学的研究」(代表者: 西秋良宏)による成果の一部である。

引用文献

- Berman, J. 1994 The ceramic evidence for sociopolitical organization in 'Ubaid southwestern Iran. In G. Stein and M. S. Rothman (eds.), *Chiefdoms and Early States in the Near East*, 23-33. Madison, Prehistory Press.
- Brunfiel, E. and T. Earle 1987 Specialization, exchange and complex societies: an introduction. In E. Brunfiel and T. Earle (eds.), *Exchange and Complex Societies*, 1-11. Cambridge, Cambridge University Press.
- Childe, V. G. 1951 *Social Evolution*. Cleveland, World Publishing Co.
- Clark, J. E. 1995 Craft specialization as an archaeological category. *Research in Economic Anthropology* 16: 267-294.
- Clark, J. E. and W. Parry 1990 Craft specialization and cultural complexity. *Research in Economic Anthropology* 12: 289-346.
- Costin, C. L. 1991 Craft specialization: issues in defining, documenting, and explaining the organization of production. *Archaeological Method and Theory* 3: 1-55.
- Crawford, H. 1991 *Sumer and Sumerians*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Davidson, T. and H. McKerrell 1980 The neutron activation analysis of Halaf and 'Ubaid pottery from Tell Arpachiyah and Tepe Gawra. *Iraq* 42/2: 155-167.
- Earle, T. 1981 CA comment on Evolution of specialized pottery production: a trial model. *Current Anthropology* 22/3: 230-231.
- Evans, R. 1978 Early craft specialization: an example from the Balkan Chalcolithic. In C. Redman et al. (eds.), *Social Archaeology: Beyond Subsistence and Dating*, 113-129. New York, Academic Press.
- Fortin, M. 1999 *Syria: Land of Civilization*. Quebec: Musée de la Civilisation.
- Jasim, A. A. 1985 *The Ubaid Period in Iraq: Recent Excavations in the Hamrin Region*. BAR 267. Oxford, Archaeopress.
- Lewis, B. S. 1995 The role of attached and independent specialization in the development of sociopolitical complexity. *Research in Economic Anthropology* 17: 357-388.
- Maisels, C. K. 1999 *Early Civilizations of the Old World: The Formative Histories of Egypt, the Levant, Mesopotamia, India and China*. London, Routledge.
- Mallowan, M. and J. C. Rose 1935 Excavations at Tall Arpachiya. *Iraq* 2: 1-178.
- Van de Mieroop, M. 1997 *The Ancient Mesopotamian City*. Oxford, Clarendon Press.
- Milliken, S. 1998 The Ghost of Childe and the question of craft specialization in the Palaeolithic. In S. Milliken and M. Vadale (eds.), *Craft Specialization: Operational Sequences and Beyond*, 1-7. BAR 720. Oxford, Archaeopress.
- Moorey, P. R. S. 1994 *Ancient Mesopotamian Materials and Industries: The Archaeological Evidence*. Oxford, Clarendon Press.
- Nishiaki, Y., T. Koizumi, M. le Mièvre and T. Oguchi 1999 Prehistoric occupations at Tell Kosak Shamali, the Upper Euphrates, Syria. *Akkadica* 113: 13-68.
- Oates, J. 1993 Trade and power in the fifth and fourth millennia BC: new evidence from northern Mesopotamia. *World Archaeology* 24/3: 403-422.
- Peregrine, P. 1992 Some political aspects of craft specialization. *World Archaeology* 23/1: 1-11.
- Postgate, J. E. 1992 *Early Mesopotamia: Society and Economy at the Dawn of History*. London, Routledge.
- Quintero, L. and P. Wilke 1995 Evolution and economic significance of Naviform core-and-blade technology in the Southern Levant. *Paléorient* 21/1: 17-34.
- Shafer, H. J. and T. R. Hester 1991 Lithic craft specialization and product distribution at the Maya site of Colha, Belize. *World Archaeology* 23/1: 79-97.
- Sievert, A. K. 1992 *Maya Ceremonial Specialization: Lithic Tools from the Sacred Cenote at Chichen Itza, Yucatan*. Madison, Prehistory Press.
- Stein, G. 1994 The organizational dynamics of complexity in Greater Mesopotamia. In G. Stein and M. S. Rothman (eds.), *Chiefdoms and Early States in the Near East*, 11-22. Madison, Prehistory Press.
- Stein, G. 1996 Producer, patron and prestige: craft specialists and emergent elites in Mesopotamia from 5500-3100 BC. In B. Wailes (ed.), *Craft Specialization and Social Evolution: In Memory of Gordon Childe*, 25-38. Philadelphia, University of Pennsylvania.
- Stein, G. and M. J. Blackman 1993 The organizational context of specialized craft production in Early Mesopotamian states. *Research in Economic Anthropology* 14: 29-59.
- Zettler, R. L. 1996 Gordon Childe and the socioeconomic position of craft specialists in Early Mesopotamia. In B. Wailes (ed.), *Craft Specialization and Social Evolution: In Memory of Gordon Childe*, 17-23. Philadelphia, University of Pennsylvania.
- Waetzoldt, T. 1971 Zwei unveröffentlichte Ur-III Texte über die Herstellung von Tongefässen. *Die Welt des Orients* 6: 7-41.
- Wailes, B. 1996 V. Gordon Childe and the relations of production. In B. Wailes (ed.), *Craft Specialization and Social Evolution: In*

- Memory of Gordon Childe, 3-14. Philadelphia, University of Pennsylvania.
- Wheeler, M. 1956 The first towns? *Antiquity* 30: 132-136.
- Wattenmaker, P. 1998 *Household and State in Upper Mesopotamia*. Washington and London, Smithsonian Institute Press.
- 井 博幸 1995 「古代メソポタミアの土器工房」 『王朝の考古学』 大川清博士古希記念会編 3-30頁 雄山閣。
- 小泉龍人 1999 「ウバイト期メソポタミアの葬制」 『日本西アジア考古学会第一回公開セミナー予稿集』 2-17頁。
- 近藤英夫 1997 「西アジア古代都市をめぐる考古学：都市の成立と展開」 『日本西アジア考古学会通信』 2号 7-8頁。
- チャイルド, V. G. 1951 『文明の起源(下)』ねずまさし訳。岩波書店。
- 常木 晃 1997 「西アジア先史時代の土器焼成窯とその生産力—考古資料と民族資料から—」 『東海大学校地内遺跡調査団報告』 7 169-185頁。
- 西秋良宏 1998 「古代西アジア土器職人の世界—都市出現期の土器生産」 『日本西アジア考古学会通信』 4号 11-12頁。
- ホークス, J. 1978 『古代文明史』 小西正捷ほか訳 みすず書房。
- 前川和也 1989 「シュメール粘土板記録における土器と陶工」 『古代中近東の土器-変遷とその背景』大津忠彦編 59-71頁 中近東文化センター。
- 渡辺 仁 1990 『縄文式階層化社会』 六興出版。

西秋良宏
東京大学総合研究博物館
Yoshihiro NISHIAKI
The University Museum,
The University of Tokyo